

賓辞の名詞化考

— Помог か Помощь пришла ка —

山 田 勇

—

ロシア語から日本語への翻訳の過程で動詞類名詞の処理に、一再ならず、困難を覚えることがある。殊に抽象名詞はその語彙層の厚さに注意を払わねば、和文脈に相応しい一読で諒解出来るような訳出は不可能な作業ということになりかねない。この現象は、つまるところ、抽象名詞の意味の場をどう設定すべきかという本質論に根ざすものといえる。筆者の最近の分析によれば、ロシア語の意味上の主辞はこれを受ける賓辞との関連で極めて多様な側面を見せているが、その原因は、「意味論主辞が問題となる文は賓辞の中に取り込まれた行為や状態の担い手に注意が向けられ」る点にあることが多い¹⁾。

本稿では斯様な賓辞部に生ずる名詞化現象を、統辞論の立場を踏まえつつ、語彙論的な知見をも加味して論証しようとするものである。

我々は日常の経験を言語表現を借りて表出する。それは時間軸に沿って順次整理され、注意深く分節された後で発話という様式で開陳される。このことから推測されるのは、現象と発話の表現形式の間に必ずしも整合性ある法則のみが働くとは限らないことである。言語によって表現された実態を分節作業を通して眺めてみれば、言語が実に複雑な成分から成り立っており、その細部が「いろいろなレベルからの法則と傾向」に支配されながら調和を保って機能している様子が窺える。この「傾向」とは計り知れぬ程、多様なものであるが、それらの幾らかは或る「傾向」を共にするのに対し、別の幾らかのものは全く対立する「傾向」をとって言語表現を彩る。そして他との対立が際立っていればいる程、その「傾向」が定着し、一つの文体ともいべき高みとなって我々に知

覚されるのではなからうか。或る事象を名詞表現を借りて写すか、動詞による描写をするかという問題も、こうした対立を媒介として生ずる現象であろう。

さて、*часть речи* なる術語がある。これは自明なことながら、品詞を意味するとされる。しかし、この術語から、我々が名詞とか形容詞、動詞といった品詞区別を設定しそれを固定化して理解しようとするのは余りに拙速にすぎると言わざるを得ない。*часть речи* はあくまでも発話の成分分割に外ならず、それだけに、それら成分の有する個有な機能に十分意を用いる必要性があろう。これは或る言語表現が多義的に理解される場合や、一つの外界現象（抽象的なケースを含む）を異なる発話形態で表示出来るという言語の有する体系上の柔構造を前提として始めて成り立ち得る立場であると言える。

筆者は名詞の有する多義性の分析を進めているが、最近、この分野に関するヴェ・ゲ・ガークの多岐に亘る業績に接し、聊かながら知見を深めることが出来た。そこで本稿では、彼の一連の論証を跡付けつつ、賓辞部に於けるエレメントの名詞化プロセスに関する分析と考察をすすめることとしたい。

二

ヴェ・ゲ・ガーク (1983)³⁾ は品詞間交差の問題に紙幅が割かれている。彼はロマンストであり、特にフランス語の文法理論に詳しい。本書はロシア語とフランス語に見られるタイポロジー研究を扱ったものである。彼に依ると品詞分類はそれらの有する特性をどの様に把握するかにより、研究者の見解もまちまちであると指摘した上で、基本的には次の二つのグループに分けるのが妥当であるとの立場をとる。先ず基本品詞の集合で、これには、名詞(N)、形容詞(A)、動詞(V)、副詞(D)が関わっている。他のものは先の補充ともいべき品詞群で、代名詞、間投詞、補助詞などが一つの纏まりを成す。名詞とは実態の名称を意味し、動詞はその実態に纏わるプロセスを記述する。この二つの基本エレメントに対して、形容詞や副詞は、実態やプロセスを特徴付けるという機能を負っている。

言語体系の中でこれらの品詞が独立して存在しているかと言えば、そうではなく、それらの特徴には相互に重なり合う部分が見られる。名詞、動詞、形容

詞、副詞は例えば代名詞 (я), 形容詞 (этот), 副詞 (там), (空間を示す前置詞 под), 動詞 (連辞 быть) などのように各品詞間に有機的な接点を有している。基本品詞である名詞と動詞は世界のどの言語にも存在しようが、それらの形態論上の差を考慮した意味上の境界の接合部分は、言語を異にすることにより非常に多様な様相を呈する。先にあげた四つの基本品詞の相互関係をロシア語に当て嵌めてみると次の様に図示される。⁴⁾

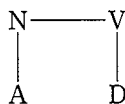


図 1

これに具体的な語彙を記入すれば次の様な例を示すことが出来よう。

нужда		нуждаться
знание		знать
нужный		нуждаясь
знающий		зная

図 2

図 2 に於いて横線より上部に記された語彙は相互の交替によって、又下部に記入された語彙は文法的処理によって作られたものである。しかしこの図にオモムを成分とする語彙に限って記入しようとするれば完全な図は得られない。ロシア語では形態論上の品詞区分は可成り載然とした体系を有するからである。従って $N \rightarrow V$ барабан \rightarrow барабанить, $V \rightarrow N$ вывозить \rightarrow вывоз, $A \rightarrow N$ больной, $N \rightarrow D$ ночь \rightarrow ночью, $D \rightarrow N$ прекрасное далеко, $V \rightarrow A$ раненный, $A \rightarrow V$ белый \rightarrow белить などを例としてガークはロシア語について次の様なマトリックス図を示している。⁵⁾

N→V	(+)	A→D	++
V→N	(+)	D→A	-
N→A	-	V→A	+
A→N	+	A→V	+
N→D	+	V→D	+
D→N	(+)	D→V	-

表1

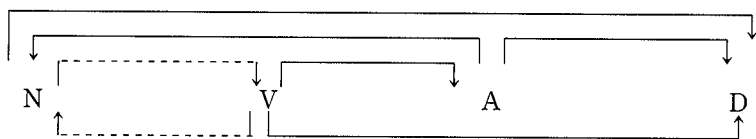


図3

図3で名詞から形容詞，副詞から形容詞，副詞から動詞への互換可能性が大変低いことが確認される。ガークの分析の主眼がタイポロジー分析にあるので，図そのものが一つの明確な判断基準に依ったものではなく，各品詞に一貫したオモニム現象がみられるか，否かという立場を一応の基準にしているにすぎないが，上述の互換不可能性に関しては説明が可能である。先ず，D→Aのケースだが，ロシア語では本来の副詞，例えば *гораздо* 等を除けば形容詞長語尾形を短語尾中性形に改変することで，副詞を作るのが生産的方法だからである。一方 N→A, D→V に相当語彙が見い出されないのは，形容詞と副詞の機能に原因を求めることが出来る。形容詞には大別して定語用法と述語用法があり，この定語用法は名詞と系る為と見ることが出来るし，副詞も同様な関係を動詞に対して有しているからであろう。ロシア語では上述の如く品詞別の形態論上の区別が一応明確であることもこの問題を考える際十分踏まえておく必要がある。先のマトリックス図の左側には名詞が関与する品詞群のデータが見られる。(表1参照のこと。) 上述の N→A を除けば，名詞と他の主要品詞には形態論上のオモニムの問題を捨象すれば，それらの機能は互換が可能であることが確認出来，このことが名詞の有する意味論上の分析に影響を及ぼしていると考えられ

る。換言すれば、名詞にはそれぞれ動詞的要素、副詞的要素が濃厚であり、又部分的には形容詞的要素も取り込まれていると見做せよう。図3は三品詞から出た矢印が副詞に集中していると読むことも出来るが、一方で名詞を中心に考察すれば、名詞と他の三品詞に有機的關係があることも認められる。

次に名詞の有する機能を具体的な例で考察してみよう。一つの場面として、今 A, B 二人の人物が居り、前者が後者に援助の手を差し伸べる状況を設定しよう。(ここでは援助がどういう性質のものであるかには触れないこととする。) 援助という行為を B とシンボル化するとこれが発話の場に現れる際には

A — B — B

図 4

という各エレメントが線状をなす。A, B, B が言語として具体化される為には、各エレメントの担う役割の設定が必要であり、更にそれらがどういう品詞により、どの様な序列で実現されるかによって図4の言語表出も幾らかのバリエーション⁶⁾を伴うことになる。

- 1) Петр помог Ивану.
- 2) От Петра помощь пришла к Ивану.
- 3) От Петра помощь получил Иван.
- 4) Петр оказал помощь Ивану.
- 5) Петром оказана помощь Ивану.

例文1)–5)の文要素を分析してみると、先ず1)文ではAはПетрに相当し、行為主体を、Bはпомощьという行為の特徴を表示し、Bは行為の受容者Иванにあたる。1)文はзалог(相)の観点からみると、能動相で表現されている。2)–4)文も同様に能動相で表現されているものの、各エレメントに割り当てられた機能は全く異なっている。2)文ではПетрはAの機能を担ってはならず、1)文に於けるB、つまりпомочьが名詞化する形(помощь)でA

の位置を占める。又1)文に見られたA—Bという文要素の分割は2)文では見られず B_0-B_1 というモデル, つまり分割不可能な動詞語結合 (помощь пришла) によって表白される。1)文に於ける行為者及び行為受容者は, 名詞 (Петр と Иван) から作り出された状況語にそれら機能が置き変わっている。3)文は B_0-B_2 というモデルで表示されその語結合に語彙交替が生じて $помощь$ は合成述語の客体部分を成していることがわかる。そこで1)文に於けるA—Петр, B—Иванの対応関係がA—Иван, B—Петрに変換され, Aが被行為主体, Bが行為者を意味する状況語の役を担っている。2)文と3)文に共通した特徴は主体の状況語化, つまり主体が1)文に対して, 展開され他のエレメントに置換されていることである。

次に4)文を見てみよう。4)文にも B_3-B_0 という述語の展開構造が見い出される。この点を除けばこの文は1)文のイデーが受け継がれていると見ることも出来る。A—Петр, B—Иванというモデル化も全く同一のパターンと見られよう。さて, 5)文はどうかといえば, 相という文法カテゴリーから見る限り, 1)—4)文とは対立する相, 受動相に属している。述語部分は $B'_3-B'_0$ という展開構造を有し, $B_3 \rightarrow B'_3$ の変換は受動化のプロセスを表示して文法上は被動形動詞過去の形をとっている。 $B_0 \rightarrow B'_0$ の変換は合成賓辞の名詞部分が主語として立っていることを示す。受動相の機能は出来る現実を動的に捉えるというよりはむしろ, 静的な表現で記述するものである。事態をこの状況に關与している Петр や Иван の眼からではなく, テーマ自体に設定する事の意図は正にこの静的記述にあると言える。Michal Váchaは動詞の意義的特性をそのダイナミズムに求め, 殊にプロセスを意味する動詞にその傾向が強く見い出され, 5)文による動詞の様な例は状態とモドゥスを意味する動詞の常として, その動態性が主として文法機能上から理解されると述べている。⁷⁾

1)—5)の文に対して施された文法上の処理が幾つか見い出せる。先ず語彙の交替であるが, これは単一述語から合成名詞述語へという変換である。そこに含まれる名詞には種類が二つある。2)文, 3)文に見られる合成述語を一般化して示せば次の様になる。

$$N_s + V_i$$

$$V_i + N_o$$

⁸⁾
図 5

ここにいう N_s , N_o の機能は文章論上の主体, 客体を意味するのであり, 意味論上のそれらとは必ずしも一致しない。その意味で, 1)文から 2), 3)文へのバリエーション化は主体の展開構造化と呼ばれる手段である。⁹⁾ 4)文, 5)文に見られる交替について考察する際には, 合成名詞述語の述部が他動性, 非他動性という対から成り立っている事が要点になろう。始発文 1) から 4) への変換は 1) 文から 2), 3) 文への変換の場合とは異なり, 行為主体の表現に何ら変更は認められない。次に 2) 文, 3) 文の場合と同様に 4) 文, 5) 文の合成述語部分を一般化して図示すれば, 以下の通りとなる。

$$V_t + N_o$$

$$V_{pass} + N_s$$

¹⁰⁾
図 6

上述の通りこれらの述語が 1) 文に対する客体の展開構造をとっていることが理解出来る。これは第三の変形手段であり, 2) 文から見れば, 同時に第一の手段たる語彙交替とも考えられる方法である。第四の文法上の手段は相の変換で, これは 4) 文と 5) 文の間でなされている。相の概念に就いてはイ・ツィンマーマンが結合価理論の立場から論じている。¹¹⁾ 彼の論拠は次の引用につきよう。

「意味構造の表象レベルと語彙素によってもっとも密接に直接関連づけられる深層語彙意味構造レベルが存在するという予測を立てることが可能である。」

「特に重要な文法構成素は辞書的内容物(語彙)¹²⁾である。語彙的手段は文構造を著しく規定し、単語は伝達しようとする意味内容と個々の言語の具体的発話内容の具現化との仲介物として働くといって過言ではない。」

「深層語彙統辞構造レベルでの文表象を始発構造と見做すことが出来る。」

ツィンマーマンのこれらの考え方は文の深層構造を構築する場合にも、各文要素の統語論的相関関係だけではなく語彙論的側面としての構成エレメントたる賓辞語彙素の結合価(アクタント)の分析に比重をかける。そこで彼は単文の始発構造を、

$$(I) \left[S_1 \left[S_2 \left\{ \begin{array}{c} V \\ A \\ NP \end{array} \right\} (NP_1) NP_2 (NP_3) \right] \left[\begin{array}{c} Prep \\ NP \end{array} NP_4 \right] \right]$$

と表示する。 S_2 は賓辞の形態(動詞, 形容詞, 名詞)を示す。 $NP_1 \sim NP_3$ は単文の種類(アクタントのそれに読み変えられる。)であり、夫々一肢文, 二肢文等を, 又外形 S_1 は賓辞語彙素と無関係な状況語, 定語を意味する。賓辞の統語論結合価数を基準とするこのモデルにそって4)文と5)文を表示すると、

$$(II) \left[S_2 \left\{ \begin{array}{c} + \quad tr \\ - \quad refl \\ - \quad pass \end{array} \right\} NP_1 NP_2 (NP_3) \right] \implies \left[S'_2 \left[S_2 \left\{ \begin{array}{c} - \quad tr \\ \alpha \quad refl \\ + \quad pass \end{array} \right\} NP_2 (NP_3) \right] NP_1 \right]$$

となるが、ただし原テキスト4), 5)は

4) Петр₁ оказал помощь₂ Ивану₃

5) Петром₁ оказана помощь₂ Ивану₃

の意味と考えるのが妥当である。この場合、 S'_2 は受動構造で NP_1 が S_2 と共に新しい構成体を形成する。4)文, 5)文のインデックスは始発の一般式に於ける結合価の最大値と各結合手の位置を示す。 α は述語動詞が反射的形式(reflective form)によって相転換を実現することを表示している。IIによって我々は4)文, 5)文の賓辞部の成り立ちの特徴を具体的なインデックスに

よって諒解出来る。

「AがBを援助する」という命題に対する1)から5)文に用いられた文法規則、つまり語彙項目の置換 (помочь→помощь прийти; помощь прийти→помощь оказать) 主辞展開構造 (Петр помог→От Петра помощь пришла) 賓辞展開構造 (Петр помог→Петр оказал помощь) 及び相の変換 (Петр помог Ивану→Петром оказана помощь Ивану) による表現のバリエーションを次に考証しよう。

三

先に例示した五種類の文は、1)文からその賓辞部を名詞化することで得られた異文である。その結果、2)文から5)文に прийти, оказать 等の意味論的には補助的機能を有する動詞が使用された。¹³⁾次に前節で触れた「変換の為に用いられた文法規則」¹⁴⁾を瞥見して整理すれば次の通りとなる。

помочь	= $X+y^1$	(動詞性)
помощь прийти	= $X+y^2$	(名詞性)
помочь Ивану	= $X+y^1$	(能動性)
оказан помощь Ивану	= $X+y^2$	(受動性)

これらをつまるところ、語彙項目と意味の差を明確に区別すべきことを示していると言える。ガークは更に、こうした y^1 , y^2 のような補助詞エレメントが語彙項目に付加されるプロセスを、シャウミヤンの適応生成モデルを援用しつつ説明しようとする。シャウミヤン (1974) に依ると、自然言語に共通する理想的な言語を、①ゲノタイプ (遺伝子モデル) なレベルの言語、又その具現化としての自然言語を、②フェノタイプなレベルの言語に分解し、①を用いて②のモデル化を進めようとする。自然言語を抽象化すれば〔1〕対象の名称、〔2〕状況の名称、〔3〕変換子の三つのクラスが考えられ、〔1〕、〔2〕は、それぞれ名辞及びそれらから成る文に分類される。これらの関係は次の通りである。変換子とは或るクラスの対象を他のクラスの対象乃至は同一クラスの対象に変

換する対象をいい、対象の名称と状況の名称を言語学的対象の始発点と考えると、更に四つの変換子が考えられる。それは次の通りである。

- 1) 名辞を文に変換する変換子
- 2) 文を名辞に変換する変換子
- 3) 名辞を名辞に変換する変換子
- 4) 文を文に変換する変換子

これらを更に記号化して、 α が名辞、 β が文を示すとすれば、 α ノタイプ¹⁶⁾の言語対象と考えられるのは

- α — 名辞
 β — 文
 $\Delta\alpha\beta$ — 名辞を文に変える変換子
 $\Delta\beta\alpha$ — 文を名辞に変える変換子
 $\Delta\alpha\alpha$ — 名辞を名辞に変える変換子
 $\Delta\beta\beta$ — 文を文に変える変換子

等であり、これらが適応生成モデルの象徴的意義として応用される。そこで例えば、

$$\Delta\alpha\beta A^1, \quad \Delta\alpha\beta A^2$$

とはそれぞれ、対象 A^1 は名辞を文に変える変換子のクラスに属する、対象 A^2 は名辞を文に変える変換子のクラスに属すると読むことになる。

次にこの操作を用いて、既述引例文 1)–5)に見られる語彙項目とその展開操作を考えてみよう。二節で基本品詞として名詞、形容詞、動詞、副詞を取り上げたが、更に変換子という概念を導入することで、例えば 1)文と 2)文に見られる名詞の動詞化などが簡潔に表示されよう。そこでこれら基本品詞を V, N, A,

D 更に R_1 , R_2 , R_3 , R_4 をそれぞれ V, N, A, D の変換子を意味するものとする。ガーク (1965) はシャウミヤンの説を援用して語彙 *учить*, *учитель*, *учительствовать* の関係を次の様に記述している。¹⁷⁾

R_1V	<i>учить</i>
R_2R_1V	<i>учитель</i>
$R_1R_2R_1V$	<i>учительствовать</i>

既に引用した諸例文に見られる *оказать помощь* もこの $R_1R_2R_1V$ という表示に該当すると考えられ、このことから $R_1R_2R_1V$ は単純形と展開形の二種類が考えられることがわかる。展開形は基本的には前述の如く $X+y$ と表示され、X に基本となる語彙項目(語彙素)が書き込まれ、y には補助詞エレメントが記入される。我々が変形という手段によって発話構成素の有する機能を調べようとする場合、例えば y にみられる様な語彙挿入がどの範囲まで認められるかという問題は重要であり、斯様な語彙の意味内容が具体的にそれと組み合わせられる名辞 X の機能に及ぼす影響は大変大きいと言えよう。代表的な補助詞構成素連辞動詞 *быть* に見られる様に、これらの構成素には動的なニュアンスは余りなく、そのことが「一連の統辞構造変形の重要な形態論上の法則開発を可能にした」¹⁸⁾ といえる。そこで次に問題になるのが、こうした補助詞構成素の意味内容の限定である。ガークはこれをして意味の場の設定と呼んでいる。意味の場は個々の発話構造に従っておのずと設定方法が分かれるので、文型に応じて用いられる補助詞エレメントも異なってくる。1)文から2)文への、又1)文から3)文への分岐に現れた主体や客体の展開構造には、四つの種類がある。その第一は動詞が名詞化される場合で $V \rightarrow N + V_q$ と示される。例として *дождь* (N), *дождит* (R_1N); *дождь идет* ($R_1R_2R_1V$) があげられる。類例を示す。

- 6) *Они собрались.* → *У них состоялось собрание.*
 7) *Пахнет.* → *Стоит запах.*

- 8) Они работают. → У них работа идет.
 9) Они борются. → Между ними идет борьба.
 10) Он взглянул на... → Его взгляд упал на...
 11) Дом построен. → Строительство дома окончилось.
 12) Пахнет. → Слышится запах.

これらの賓辞の名詞化に伴う展開構造の特徴について分析しよう。先ず6)文と8)文では行為主体が補語化し、変形文全体がそれによって動作表現から、状態表現へと移行している。これは名詞化表現の静態的特質の表れとみることが出来る。主体表現に着目するなら更に10)文では「彼」が「彼の視線」に交替している。両者の関係は行為主体と行為主体の知覚能力との対応という関係として表示されている。これと関連して、7)文と12)文には嗅覚表現が二様に名詞化されている。7)文は嗅覚の存在を問題にしているのに対し、12)文はそれを五感の一部として、どの感覚が看取されるかを表現したものである。換言すればこれも10)文の知覚能力に係る表白であると言えよう。

8)文、9)文、10)文は主体の表現に一致した傾向がある。先ず8)文と9)文は始発文の主語が共に人称代名詞 ониであり行為主体を意味しているが、変換文では у них, между ними と補語化されている。この二文への変形には、идти という非他動詞が補助詞要素として用いられているが、これに対して10)文での он→его への交替にはそれが行為主体から同一人物の身体の一部である視覚の働きの表現へと変更されている。又動詞 упасть は動詞 идти とは異なり、単なる連辞的ニュアンスを意味する語彙であるとは言えない。アカデミー版17巻ロシア語辞典に登録されている упасть の意味層を一瞥すれば概略次の通りでこのことが確認出来る。¹⁹⁾

1. Переместиться сверху вниз под действием собственной тяжести.
2. Повалиться на землю, потеряв опору в основании.
3. Опуститься вниз одним концом, одним краем, будучи закрепленным другим.

4. Тяжело, с большой силой опуститься, обрушиться на кого-, что-либо при ударе.
5. Внезапно появившись, быстро распространиться где-нибудь, лечь на кого-, что-либо.
6. Наступить, надвинуться внезапно. О природных явлениях.
7. Опуститься ниже, понизиться в уровне.
8. Уменьшиться, сократиться в величине, в количестве.

11)文に見られる変換は受動相から中動相への交替で次の様にその変形の性質が示されよう。

$$\left[\begin{array}{c} \left\{ \begin{array}{c} - \\ \alpha \text{ refl} \end{array} \right\} \text{tr} \\ S_2 \left\{ \begin{array}{c} + \\ \text{pass} \end{array} \right\} \end{array} \right] \text{NP}_2 \implies S_2 \left[\begin{array}{c} \left\{ \begin{array}{c} - \\ (+) \text{ refl} \\ (\beta) \text{ pass} \end{array} \right\} \text{tr} \\ S_2 \left\{ \begin{array}{c} + \\ \text{pass} \end{array} \right\} \end{array} \right] \text{NP}_2 \text{ (NP}_3 \text{)}$$

主体展開構造の第二のものは、 $V \rightarrow N_q + V$ と変化する文型で

- 13) Гремит. → Гром гремит.
- 14) Он глядит сурово. → Его глаза глядят сурово.
- 15) Он дотянулся до стола. → Его руки дотянулись до стола.

等の例文がこれに相当する。13)文と 14)文, 15)文には文体上差異が見られる。13)文では、変形文に主語が加えられ、その主語が動詞と同語根である。自然現象の表現にはテーマ欠落文が多いが、громを記入することでこのгромが特別な文脈上のニュアンスを帯びる(旧情報にあたる)ことを示している。蓋し13)文が $V + N_q$ つまりゲノタイプレベルで $R_1 R_2 R_1 V$ と表せる文型であり、これをフェノタイプレベルで表出すれば

13') Гремит гром.

が予定されよう。13')文はそれ以上分節不可能なレーマだけから成る文である。これに対して 14)文, 15)文は 10)文と対比させられようが、これらの文は機

能上 10)文とは異なるものである。10)文では先にも触れておいた様に感覚そのものが言及されているが、これらの文では он→его глаза, он→его руки と目や手という身体の各部位が有する機能が主語に置換されている。ペ・アダメツはモデル間変形の問題を取り上げる中で、「変形とは一つのフォームを有する文を別のフォームの文に変換することで、この場合、語彙論的内容と基本的意味が同一でなければならない²⁰⁾」と指摘している。語彙交替を伴うこの種の変形は文体的には始発文からの明らかな逸脱となるであろう。ガークの立場は「変形の時の幾らかの語彙単位が同一でならなければならぬという考えは（適応生成モデルをもとにした言語研究の二つのグレードに就いてのシャウミヤンの理論の立場から変形に接近するなら）二次的要素でしかない²¹⁾」と語彙論的内容の同種性に柔軟に対応するよう求めている。そして展開構造と語彙交替を前提とすれば、変形方法の応用範囲が広がり核文の意味範囲が広がるという方法論が確立されることになる。

さて、ここに一枚の絵があり、これを鑑賞する人物がいるというシーンは複数の表現が可能である。人間を中心に記述すれば能動相となって

16) Он взглянул на картину.

と表現されよう。逆に絵画を主体とした能動相

17) Картина привлекла его взор.

やその人物の目という身体器官を独立させて次の如く中動相で表現することも可能である。

18) Его глаза обратились к картину.

つまり 16)文に見られる人物の行為主体性は、別の主語文に於ける主体性(17)文の его взор, 18)文の его глаза)とも意味論上は同定出来る語彙交替といえ

よう。

客体の展開構造も下位範疇が見受けられる。最初に $V \rightarrow V + N_q$ と表される構造から検討しよう。

- 19) думать → думать думу
- 20) спать крепко → спать крепким сном
- 21) потупиться → потупить голову
- 22) согнуться → согнуть спину
- 23) идти твердо → идти твердым шагом

19), 20)は所謂内的補語と呼ばれる名詞化の過程である。内的補語とは動詞とトートロジーな関係にある語を文の二次要素に置く文型でこの場合名詞化された語彙(думать→дума; спать→сон)は本体の動詞に一体化されるべき表現である。19), 20)の語結合に一致定語 крепкую, крепким を置くことによって強調が可能である。これらの表現をゲノタイプレベルで示せば $R_1 V \rightarrow R_1 R_1 V R_2 R_4 V$ となり強調構文であることが理解出来る。21)と22)には再帰小詞の補語化が見られる。再帰動詞は元来独立した再帰代名詞との融合過程で生じたものであり, себя を文脈によって具体化して表現することが可能である。例文は себя が夫々, голова や спина といった同一人物の身体の一部を意味する語彙交替による変換例であると見做せよう。20)と23)に特徴的なのは副詞の名詞化過程である。крепко → крепким сном ; твердо → твердым шагом 20)が内的補語を用いるのに対し, 23)は идти から換喩法によって шаг を派生させて идти を補助詞として用いた例である。この方法では斯様に状況語も名詞化が可能となる。

別種の客体への述部展開構造を視座に入れよう。これは $V \rightarrow V_q + N$ というパターンで表現される。

- 21) отчаиваться → впасть в отчаяние
- 22) освободить → выпустить из тюрьмы

23) доверять → оказывать доверие

21)と 23)にはいずれも動詞類名詞が含まれ、22)は換喩法による名詞化の例である。この種の変換文に見られる V_q は補助詞的ニュアンスを有する動詞構成素である。ガークはこれらの動詞が、プロセス、徴表、感覚などを表す動詞で占められると分析している。そこで次にこれらの展開構造²²⁾で用いられた補助動詞に焦点を合わせ、それらの特徴と名詞化の過程を若干調べることにする。

四

例えば、「AはBである」という命題をロシア語では、状況構成エレメントをその順に配置するだけで表現出来る。(A—B.) この場合、連辞の有無は発話者の意識が、存在や状態に置かれるか否かにより記述されたり、ゼロ連辞として扱われたりする。これは斯様な意識の有無が“存在や状態”の意味を有する一般動詞化を促すか、連辞としてとどめ置くかという連辞動詞の質的な転換を意味している様に思われる。次にこのことを具体例に則して検討しておこう。

24) Флеминг — изобретатель пеницилина.

25) Искусство — украшение жизни.

24)文、25)文は являться が挿入されれば文体上の変化を受け公式文書のニュアンスを有する様になる。この文体上の変化は、名詞化されているエレメントを動詞で表現する時、更に相の変換として理解される。

26) Флеминг изобрел пенициллин.

27) Искусство украшает жизнь.

26)文、27)文に用いられた изобретать, украшать はアカデミーの17巻辞典によると、それぞれ、

Находить, создавать что-либо новое, прежде неизвестное

Делать кого-, что-либо красивым, придавать кому-, чему-либо привлекательность

と説明されている。共に他動詞であり、意味の場からみれば украшать に補助詞のニュアンスを読み取れる。そこで украшать の意味の場を考慮して、

УКРАШАТЬ = являться украшением

とすれば、25)文と27)文の用語に基準を設けることが出来よう。そこで являться にあたる動詞をどれ位い設定すべきかという問題に直面する。それで更に 24)文—27)文以外に前置詞を含む二肢文を組上にのぼせよう。

28) Миша в ссоре с братом.

29) Книга сейчас в печати.

28), 29)文は共に находиться を補って考えることが出来る文である。両文とも状態を表現した構文であるが、これらを別の再帰動詞で表現することも可能である。

30) Миша ссорится с братом.

31) Книга сейчас печатается.

30)文の再帰小詞は相互動作を意味する中動相であり又 31)文は受動相である。これらは、24)文—27)文とは相概念に於いて対立関係にあると考えられる。又、

32) С раннего утра он уже за работы.

の例に見られる様に、能動相 (работать) に変換が可能である場合も散見される。この場合、非他動詞を用いると、

33) С раннего утра он уже сидит за работы.

という表現とも受け取れる。つまりこれらの動詞も

ССОРИТЬСЯ = находиться в ссоре

РАБОТАТЬ = сидеть за работы

という意味の場を設定出来ると考えるのが妥当であろう。

述語の名詞化に伴う意味の場の規模はどれ程になるかと言えば、ガークの試算では、この問題を二肢文に限った場合、合計六を数えるとしている。各場に含まれる補助動詞は以下の様になる。

場 No. 1: войти, вступить, упасть, впасть, лечь, стать

場 No. 2: быть, находиться, пребывать, сидеть, лежать, стоять,

場 No. 3: выйти, выбраться

場 No. 4: ввести, впустить, бросить, кинуть, ввергнуть, подвергнуть

場 No. 5: держать

場 No. 6: вывести, выпустить

²³⁾
表 2

表 2 は意味の場 No. 1—No. 4; No. 2—No. 5; No. 3—No. 6 をそれぞれ行為の始発、状態、休止のグループと関連させて読む。28)—29)文の様な前置詞を有する名詞化文はこれらの対応補助動詞の援用を受けることが可能となる。

五

本稿では、名詞の有する多義性の分析、考察をすすめた。言語の有する機能

には、二つの対立する概念が拮抗した関係を保ちつつ存在するカテゴリーが幾らも見られる。統辞論の分野でもこのことは例外ではなく、本稿のテーマ名詞表現と動詞表現もそうした対立概念の一つと言える。

品詞は本来固定し確立された概念ではない。ロシア語では個々の品詞はそれぞれのパラディグマによって形態論上の区別が可成り確立されているが、それらの機能面を文単位の変形操作で考察すると、相互に交差していることがわかる。賓辞部を名詞化するプロセスには、大別して、次の三種、つまり主辞展開構造、賓辞展開構造及び相の変換というバリエーションが存在する。これら三種の変形文に共通する特徴は、表現の静態的表示である。動詞表現は、基本的に、 $X + Y^x$ というエレメントから成り立っている。X は一種のセマンテームと考えられる集合、又 y^x は叙想性と文法カテゴリーを表す集合である。述語の名詞化でいえば、X は名詞化される対象、 y^x はそれに随伴する補助詞的動詞である。これら補助詞的動詞は変形文で連辞的色彩が濃厚であり、始発、状態、休止の意味を有するものが多い。名詞化表現の有する客観的ニュアンスはこれが一因と考えられよう。

名詞化表現の文体論的考察は次稿に譲ることとしたい。

注

- 1) 山田 勇 ロシア語に於ける意味論上の主辞に就いて。ЧЕХОВの „КАШТАНКА” を分析して 香川大学 研究報告 I部 57号 (1983.1.)
- 2) Michal Vácha: Analytická verbonominální spojení a jejich funkce v odborném stylu, Československá Rusistika XXI, 1976, 2, 62—68
- 3) В. Г. Гак: Сравнительная типология Французского и русского языков, Изд. “Промсвещение”, М., 1983, 92—118
- 4) В. Г. Гак (1983) この他、三要素システムとして $N \begin{array}{c} \text{---} V \\ \diagdown \\ A(D) \end{array}$ をとる言語の例に Б. А. Успенский はオランダ語をあげている。
- 5) В. Г. Гак (1983) フランス語の部分は省略した。
- 6) В. Г. Гак: Использование лексических средств при синтаксических трансформациях, “Филологические науки”, М., 1965, No. 4
- 7) M. Vácha (1976)
- 8) В. Г. Гак (1965)

- 9) В. Г. Гак (1965)
- 10) В. Г. Гак (1965)
- 11) И. Циммерманн: Синтаксические Функции актантов, залог и переходность, В кн.: “Проблемы теории грамматического залога” АН СССР, Л., 1978, 71—79
- 12) カッコ内は筆者による。
- 13) 日本語の、名詞+「する」にあたる。
- 14) В. Г. Гак (1965)
- 15) С. К. Шаумян: Аппликативная грамматика как семантическая теория естественных языков, Изд. “Наука”, М., 1974, стр. 9.
- 16) С. К. Шаумян(1974) 30—31
- 17) В. Г. Гак (1965)
- 18) В. Г. Гак (1965)
- 19) Словарь современного русского литературного языка, Изд. АН СССР, М.—Л., 1962
- 20) Русский синтаксис в сопоставлении с чешским, Státní pedagogické nakladatelství Praha, 1982, 182—197
- 21) В. Г. Гак (1965)
- 22) В. Г. Гак (1965)
- 23) В. Г. Гак (1965)

БИБЛИОГРАФИЯ

- В. Г. Гак: Номинализация сказуемого и устранение субъекта, В кн.: Синтаксис и стилистика, Изд. “Наука”, М., 1976, 85—102.
- И. Я. Чернухина: Форма изложения в художественной прозе, “Филологические науки”, М., 1983, No. 1
- АН СССР: Русская грамматика т. 1, Изд. “Наука”, М., 1980.
- А. Н. Гвоздев: Современный русский литературный язык, ч. 1, М., 1967.
- О. А. Лаптева: Русский разговорный синтаксис, Изд. “Наука”, М., 1976.
- АН СССР: Русская разговорная речь, Изд. “Наука”, М., 1973.

(注にあげた文献は除く。)

РЕЗЮМЕ

К наблюдениям над номинализацией сказуемого

Статья посвящена актуальным проблемам многозначности имени существительного. В Функции естественного языка имеется два противоположных представления. В круг подобного рода явлений мы включаем нашу тему, т. е. выражение глагола и его замену словосочетанием.

Части речи—это понятия соотносительные. Их наличие тесно связано с возможным расчленением семантической структуры предложения на различные составы. В русском языке формально объективировано расчленение предложения на части речи. Однако с точки зрения преобразования предложения в целом речь идет о “соотносительности” функций части речи.

Таковы же общие соображения, к которым приводят наблюдения над преобразованиями $V \rightarrow N$:

- 1) субъектные преобразования.
- 2) объектные преобразования.
- 3) трансформации, в результате которых возникает изменение залога.

Наблюдения показывают, что в цепи имен элиминируется чаще всего сильно характеризующий носитель признака. В. В. Виноградов же считает, что всякая косвенная номинация является способом разрешения конфликта между экспрессивной задачей сообщения и устоявшимися грамматическими формами высказывания.